

Title	陽明文庫蔵「道書類」の紹介(十五): 貞慶撰『〔臨終用意事〕』翻刻・略解題
Sub Title	
Author	恋田, 知子(Koida, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2014
Jtitle	三田國文 No.59 (2014. 12) ,p.96- 99
JaLC DOI	10.14991/002.20141200-0096
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20141200-0096">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20141200-0096</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 陽明文庫蔵「道書類」の紹介(十五) 貞慶撰『臨終用意事』の翻刻・略解題

恋田 知子

前号に続き、陽明文庫蔵「道書類」のうち、『臨終用意事』を紹介する。これまでも述べたように、陽明文庫蔵「道書類」は、仮名法語を中心に、あわせて十八種類の書物が一括されたものであり、慶長・元和年間(一五九六―一六二四)の奥書を有するものが含まれていることや、とりたてて書写時期の異なるものも見えないことなどから、本書についても、おそらく同じ時期に書写されたものと推察される。

本書は、法相宗中興の祖として知られる解脱上人貞慶(一一五五―一二一三)が臨終の心得を六箇条に分けて説いたとされるものである。『臨終用意事』あるいは『臨終之用意』とも称され、臨終の病人および看病人の心得や遺体に対する処置など、臨終行儀を極めて具体的に説いている。

臨終行儀については、伝善導撰の『臨終正念訣』を基盤とし、源信の『往生要集』巻中末の「別時念仏・臨終行儀」や伝法然の『臨終行儀』(『臨終講式』)など、臨終を重視する浄土宗において多くの典籍が編まれた一方、道範撰の『臨終用心事』や覚鏝撰の『一期大要秘密集』など、真言宗においても展開を見せる。中世を通じて数多の臨終行儀書がなされ、近世に

はそれらの校訂編集や出版も行われており、人間にとって不可避である死への対処法として広く享受されたものと推察される。

『臨終用意事』は、浄土宗系の臨終行儀の言説を踏まえたつても、貞慶の春日信仰により念仏は「大明神」と置き換えられており、仮名交じりの平易な文体で、臨終の心得をより具体的に示す点などに特徴がある。例えば、多くの臨終行儀書において指摘される「酒肉五辛」の禁制については「五辛」を「葱蕪」と例示したり、焼き魚の臭気を病人のもとに及ぼさないようにとするなど、貞慶独自の細かな注意が示されている。さらに、看病の人数や心得、枕水の作法など、『臨終用意事』における具体性は、良忠の『看病用心抄』や在阿の『臨終指南鈔』などに引き継がれており、宗派を超えて、後世の臨終行儀書類に少なからぬ影響を与えたことがわかる。

近世以降の臨終行儀書類にもしばしば引用され、広く享受されたことをうかがわせるが、伝本はそれほど多くは現存していない。『日本大藏経』法相宗章疏二に収録された佐伯定胤編『解脱上人小章集』のうちの『臨終之用意』、および『真言宗

安心全書』収録の『臨終用意事』が知られており、前者は法隆寺古写本とされ、後者も古写本に依るとあるが、具体的な底本は未詳である。なお、京都大学附属図書館には、『臨終大事影説』『除魔説』と合わせて文久二年（一八六二）に書写された『在家臨終用意事』が伝存する。

本書は、『真言宗安心全書』収録の『臨終用意事』にやや近いものの、上記三本のいづれとも細かな異同が認められ、新出伝本と位置づけられる。江戸初期に諸宗の仮名法語とともに貴族圏で写されたと推察される点でも極めて貴重な一本といえよう。なお、書誌については、以下のとおりである。

- ・ 函架番号 近ト一七二一ソ
  - ・ 形態 写本。一冊。仮綴。
  - ・ 寸法 縦二八・六糎。横二〇・一糎。
  - ・ 表紙 本文表紙共紙。楮紙。
  - ・ 丁数 墨付三丁。
  - ・ 本文 半葉十行。漢字平仮名交じり。字高約二二糎。
  - ・ 外題 なし。
  - ・ 内題 なし。
  - ・ 奥書 なし。
  - ・ 印記 一丁表右上に「陽明藏」の朱額形印あり。
- 翻刻に際して、本文は底本に忠実を期したが、私に句読点を付すなど、読解の便宜をはかった。なお、見消については、訂正線で示した。

注

- (1) 陽明文庫蔵「道書類」の詳細については、『三田國文』連載の翻刻紹介のほか、拙稿「室町期の往生伝と草子―真盛上人伝関連新出資料をめぐる―」（『唱導文学研究』第六集 三弥井書店 二〇〇八年）、拙稿「説法・法談のヲコ給―幻中草打画』の諸本―」（『仏と女の室町 物語草子論』笠間書院 二〇〇八年）、拙稿「比丘尼御所文化とお伽草子―恋塚物語』をめぐる―」（『徳田和夫氏編『お伽草子 百花繚乱』笠間書院 二〇〇八年）を参照されたい。
- (2) 臨終行儀については、池見澄隆氏「中世の精神世界―死と救済―」（人文書院、一九八五年）、神居文彰氏・田宮仁氏・長谷川匡俊氏・藤腹明子氏編『臨終行儀―日本のターミナル・ケアの原点―』（北辰堂、一九九五年）、齋藤雅恵氏「密教における臨終行儀の展開」（『ソプル』、二〇〇八年）小山聡子氏「親鸞の信仰と呪術―病氣治療と臨終行儀―」（吉川弘文館、二〇一三年）など参照。
- (3) 齋藤雅恵氏は、前掲注(2)『密教における臨終行儀の展開』第三章「真言宗における臨終行儀の展開」において、四宮姫大神（十一面観音の垂迹）を信仰する貞慶の「春日明神とおした観音信仰」に基づく独自の臨終行儀書とらえられている。
- (4) 長谷川匡俊氏「江戸時代の『臨終行儀』史料の紹介と若干の考察」（『淑徳大学大学院研究紀要』一、一九九二年二月）等参照。

【附記】

本稿を成すにあたり、閲覧の御許可を賜った財団法人陽明文庫、京都大学附属図書館に深く感謝申し上げます。本書の翻刻を御許可いただき、御教示を賜った、陽明文庫長名和修先生に、心より御礼申し上げます。

なお、本稿はJSPS科研費（課題番号二五三三〇二五九）による研究成果の一部である。

【翻刻】

一人の命不定也。平生尚難憑。況病中  
哉。時々無油斷、臨終正念をねかふへき也。

一最後の妄念は惡道の業也。一切世間の事、

殊更に病人の可執心留事、可腹立事、

可貪愛事、病人に不可語。看病の人

の問事あらは、心にさはらさるやうに可語。か  
たりおほりなは、何事も皆々夢也。南無

大明神忘給なとすゝむへき也。病人の心可

留資財なと、不可近付。

一魚鳥を食し、酒に酔、葱慈ソウヒなと食し

たらん人をは、いかに親人シツキなりとも、門の内にも

も不可入。天魔便を得て、心亂必惡道に落

故也。病人の心に違たる人、努々不可近付。惣て

問來人の出入、一々に病人に知する事、返々  
故實なき事。

一病人のあたりには、五人或三人には不可過。人

多はさはかしくて、心みたるゝ故也。病人の

居所には何にても信仰仏を居奉、常纒

香を焼、餘念と見時は、任約束、神呪にも

宝号にも観念にもあれ、可勸也。家中に

魚を焼なとして、病人の處に香花カを得よほ

す事なかれ。

一只今とみゆる時は、本尊を病人の目前に

向へ、耳のそはによりて、臨終を只今也。來

「(1オ)

迎の聖衆、光明かくやくとして、爰に來給へり。

大明神唱へ給へとて、病人の息に合て、はや

からず遅からず、大明神を可唱也。既終て後、

一時はかり耳に可唱入也。上は死様なれとも

底には心あり。或は魂はやらすして、死人の

あたりに有て、稱名を聞ぬれば、彼惡道に

入へきものなれとも、中有よりあらたまりて

淨土に生る故也。

一死て後、五時も六時もはたらかすへからず。是古

人の深誠也。死て後、しはらくしはりかゝむ

へからず。況イハシヤまた心有時、看病の人のあらく

あたり、或はかゝめなとする事、返々あるへか

らさる事也。断末摩と云風、身カの中に出來

時、骨と肉と離なり。此死苦病苦にそふ

時、指にてもあらく身にふるれば、盤石をなけ

かくるやうに覚也。力よはる故に荒ウいうこかさ

れは、人の目にはさほとゝはみえされとも、内心の痛

いふはかりなき事也。一生の昵カクヒ只今限なり。

善知識と云、看病の人と云、悲心ヒシに住へし。

疎略を存へからず。又臨終の時は喉かはく

故に、清き紙に水をひたして、時々すこしつゝ

うるほすへし。誰か水と名をあらゝしく

おほくしほり入へからず。人を門に置いて問に

來る人をあひしらはすへし。礼儀なれば

歎も歎さるも親疎多こそりぬれば、心亂

「(2オ)

「(2ウ)

て必悪道に入也。惣て仏像にあらすは、他の色  
をみすへからす。法音にあらすは、他の音を  
聞へからす。笠置の上人の御イマシメ誠なり。ゆめく  
忽諸する事なかれ。

「(3才)

「(3ウ)